

第二部

HAPPY ENDINGの 魔力と幸福な陶酔



Dear Cinderella

中西 建人 (なかにし・けんと)

僕はかわいらしい女の子が大好きだ。もちろん、シンデレラもその一人である。かわいそうな運命をたどってきたシンデレラ。その健気な姿がとてもいい。くびれも、あしの細さもとてもいい。こんなことになったのは授業でシンデレラを見たからだ。簡単なシンデレラの物語は把握済みだったが、ディズニーが作ったシンデレラははじめてだった。たかが、子供が見るような物語だろうと思い、昼寝でもしようかと思い、体勢を整えていた。そんな僕の前の画面にシンデレラが写った。一瞬で目が釘付けになった。美しい青い目、きれいな唇、いい感じのくびれ、どれも僕の好みの女の子だった。僕は寝ることもなく、ずっと画面を見ていた。

母親や、姉からの必要以上のいじめにシンデレラは毎日耐えていた。かわいそうですごく助けたかった。そんなシンデレラも転機が訪れてお城のパーティーにいけるようになった。ビビデバビディブーのおばさんありがとう。汚い服を着ていたシンデレラだったが、魔法によってもっといい服を着ることで、もっともときれいになっていた。そのドレス姿もすごくかわいかった。シンデレラは元々がかわいいから、王子様はすぐにシンデレラに目をつけた。まったくいい人が見つからずに苦戦していた王子様だったがシンデレラをみた瞬間ビビッと来たようだった。よくちまでも結婚するひとはビビってくるというのがこんな感じなのだろうと思った。これでシンデレラが幸せになれる、とおもったのに時間が来てしまった。これは元々のお話と同じだった。なかなかうまくいかないものだな。

ガラスの靴をもって大侯様がさがしにきた。これでシンデレラは幸せになれるとおもったら、ここでも継母が邪魔をする。ひとり部屋で泣きじゃくるシンデレラの姿はすごくかわいそうなものだった。一粒一粒こぼれる涙がすごくきれいで、シンデレラの心のきれいさを表しているのだと思う。しかし、ねずみの頑張りでシンデレラは部屋からでて、シンデレラは一発逆転できた。しかし、アナステイシアの足は本当にでかかった。シンデレラは王子さまと幸せになってしまった。本当は僕がしたかったがそこはしかたない。つぎのシンデレラを探しに僕はたくさんの女の子と出会っていく。



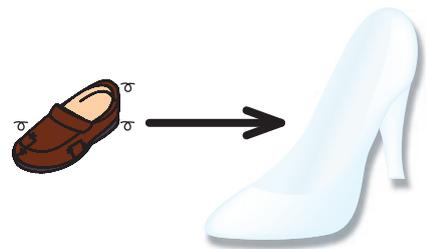
『シンデレラ』が教えてくれる恋愛の掟

平川 佳美 (ひらかわ・よしみ)

女の子なら誰もが一度は、白馬の王子様が迎えに来てくれることを夢見ながら眠りにつくといった経験をしただろう。私もその一人であり、きっと迎えに来てくれるから、その時までにもっと綺麗になって準備しておかなくちゃと子供ながらに考えていた。しかし現実はそのように甘くなくて、思い焦がれていた王子様にはほど遠い男の子ばかりの現実ギャクりにくのである。その中で、現実を受け止めて新たな道を歩き出す者だけが真の幸せに辿り着けるのである。『シンデレラ』には幸せになるためのヒントが隠されているのだ。

キーワードは、根性と仲間。 まず根性とは、何が何でも幸せになってやる！という気持ちである。最後の最後まで諦めない姿勢が大事で、その姿勢が夢にも見ない運を生むのである。シンデレラは様々な困難にぶつかっていたが、涙を流しながら、歯をくいしばりながら幸せを求め根性を見せたのだ。あの洗濯の量や朝から晩まで仕事をこなすのは至難の業だが、幸せを求めているからこそ成し得たのではないか。私たちの世界でも、何度チャレンジして無理だったとしても次はいけるのではないかと期待し、根性を見せてもう一度チャレンジすることがある。そして成就する場合も多い。最近はずぐに諦めてしまう人が多いが、シンデレラの根性を見習って欲しいと思う。次に、仲間である。仲間は恋愛を成就する上で、必須な存在だと認識している。落ち込んだ時、相談事がある時、アドバイスが欲しい時、困難に陥った時、助けてくれるのは仲間である。ただし、ここで主張したいのはただの形だけの仲間はいらぬのだ。日ごろから持ちつ持たれつの関係が出来上がっており、心から信頼して、相手のことをまるで自分のことのように考えられる関係のことを仲間と呼びたい。シンデレラは日ごろから、動物たちと心を交わしひたむきに前だけを見て過ごしてきた。そんな姿に周りの動物たち、魔法使いまでもが力を貸したくなったのだ。ここで大事なのは、相手とちゃんと向き合うことで自然と強い見方になってくれて、その姿を見ていた人までも巻き込んで見方になることができるということである。

以上が私が『シンデレラ』を見て恋愛というテーマについて考えたことである。私は元々上品な家柄で育ったプリンセスではなくて、自らの運命から裸足で逃げ出し、幸せをつかみに行くシンデレラに強く惹かれた。運命なんて変えてしまえばいいのよ！と言わんばかりのキャラクターに共通点を見出せるし、人生において大事なことを思い出したような感覚に囚われた。年を重ねるにつれて、恋愛が下手くそになっていくように思えてならなかったのだ。自分ばかりを守り、自分が傷つかないように行動すること自体に大切なことは存在するのだろうか。愛する気持ちや、思い焦がれるような気持ちは一体どこに行ってしまったんだろうかとふと自分に問いかけてみる。きっと本当はとろけるような恋愛を求めているのだ。しかし自分を守るために、あえて避けてきたのだ。そんな自分を認識したからには正々堂々ととろけるような恋愛をしようと思った。臆病にならずに、自分の気持ちに素直になって楽しもうじゃないかと思わせてくれる作品だ。また恋愛につまずいた時に、この作品を見返すだろう。



私もシンデレラになりたい !!!!!

柿内 優樹 (かきうち・ゆうき)

『シンデレラⅢ』をみた。シンデレラってほんのりとしか知らなかった。シンデレラって、魔法使いが出てきてなんやかんやでうまくいく話だから全然面白くない話だとおもっていた。でも授業で見た時驚いた。すごく面白かった。はらはらするところもあった。義理の母や義理の姉妹にいじめられつつ、でもしっかりと幸せをつかんで……。シンデレラたくましい!!! ってなった。その次から『シンデレラⅢ』を見るって知ってすごく楽しみだった。それと同時にどんな話だろうってすごく気になった。いざ始まってみるとそう来たかってなった。魔法の杖をうばってアナステシアがガラスの靴を履くことができるなんて。でもそこでも負けないのがシンデレラ。果敢にお城へと乗り込みます。魔法の杖を奪ってビビデバビディってあとブーっていうだけやん!!!! 後一言のところで捕まっちゃうし……。すごくそこがハラハラドキドキした。手に汗握る場面だった。そこから、遠い島へ流されるのだけど、ネズミたちの頑張りもあり王子が助けに!!!! 崖から王子が飛ぶのがすごくカッコよかった。シンデレラのために懸命にがんばる姿すばらしかった。そこから、ハッピーエンドかと思いきやまだ、義理の母が邪魔してくる。でもなにがあっても帰ってくるのがシンデレラ。やっぱりすごい運を持っているんですね。そこで、アナステシアのひとこと **"I don't."** この一言があったからシンデレラは助かった。今まで、悪者だったアナステシア。ここですごく見直した。いいやつやん。やっぱり女の子は本当の自分を愛してくれる人じゃないとだめなんですね。それで、シンデレラはハッピーエンド!よかったね。でも見どころはもう一つあって、エンドロールでアナステシアが男の子といい感じになっているのを発見!! おおおおおお!!!! ってなった。アナステシアもいい人が見つかってよかったね。でも、映画中ずっとアナステシアが出てくるたび「ゆうきや!!!」っていわれ続けた。私もアナステシアじゃなくてシンデレラになって王子様と出会いたい!!

Cinderella III

『シンデレラⅢ ～戻された時計の針』



『シンデレラⅢ』

～真実の愛とは～

春山 宝謨 (はるやま・たかも)

『シンデレラⅢ』は、壮大な **LOVE STORY** が描かれている、愛の素晴らしさを物語っている最高の映画である。また、私自身最近ある女性とお付き合いさせていただくことになって、愛とは何か、幸せとは何かということはこの映画を通して、より一層深く考えるようになった。そこで、私はこの『シンデレラⅢ』で感じた真実の愛の形、純粋な感想をこれから述べていきたいと思う。

まず初めに、この映画を通じて思ったことから述べよう。なんといってもこの映画は、ディズニープリンセス映画ということで情景や人物がきれいに描かれている。やはり、内容がどれほど良くても画も良くなければ、それほど大きな感動を人に与えることは難しいだろう。このようなきれいな画もあって、私たちはこの映画に引き寄せられていく、魅せられていくのだと感じた。そんな私たちをさらに虜にさせたのが、この映画のストーリー性である。魔法の力で記憶を失ったプリンス・チャーミング王子になんとか自分のことを思い出させようとするシンデレラの様々な言動を見て、なんて健気なんだと心打たれた。魔法の力に臆せず、いろんな仲間たちと協力して最後には、王子に自分の存在を思い出させた。その要因には、最後まで王子を想って諦めなかったシンデレラの気持ちの強さ、愛の強さも大きく影響しているのではないだろうか。

また物語が進むにつれて、大きな心の変化があった人物もいた。そう、アナスタシアである。彼女は、最初は王子とシンデレラの二人は魔法の力のおかげで恋に落ちたのだと勘違いしていた。だからこそ、魔法の杖を手に入れた当初は、これで王子様と結ばれる、王子様に愛してもらえると考えていたのだろう。しかし、己の力だけで王子の記憶を取り戻そうとするシンデレラ、またところどころに感じる王子様との愛の何か物足りなさ、違和感。徐々に彼女の心の中には、自分たちのしていることは間違っている、これは真実の愛ではないという思いが強くなってくる。そして最後には、姿を同じにされたアナスタシアは私は本当のシンデレラではない、と王子の結婚の申し入れを断った。

以上のことから私は、真実の愛とは何の力の前にも屈しない強靱なものだと思った。二人の間でお互いに相手を思いやる、愛するという気持ちがあれば、それはどんな困難にも、どんな壁にも立ち向かっていくエネルギーにそれはなるのではないだろうか。そして、真実の愛なくして、何かの力を借りて手に入れる幸せはどこか物足りず、本当の幸せではないのだと思う。

愛はなぜとろけるのか、それは自分が相手のことを大事に思い、心の底から愛して、相手も自分のことを大事に思ってくれて愛してくれるからだろう。愛の形とはそのような愛の相乗効果がもたらす結果なのではないだろうか。

私は実は、授業で『シンデレラⅢ』を見てから、もう一度彼女と二人でこの映画を見直した。彼女もこの映画にとてもうっとりしていた。それから私たちはよく、お家でなにか **DVD** を見ることになったらディズニープリンセスの映画をみるようになった。やはり、これらの映画は私たちに大きな感動と大きな幸せを与えてくれる。本当に愛し合う二人というのは、何にも代えがたい、とても素敵なものなんだと強く思った。

大きな巨人 小さな僕 ～ちっぼけな僕たち～

田中 駿希 (たなか・しゅんき)

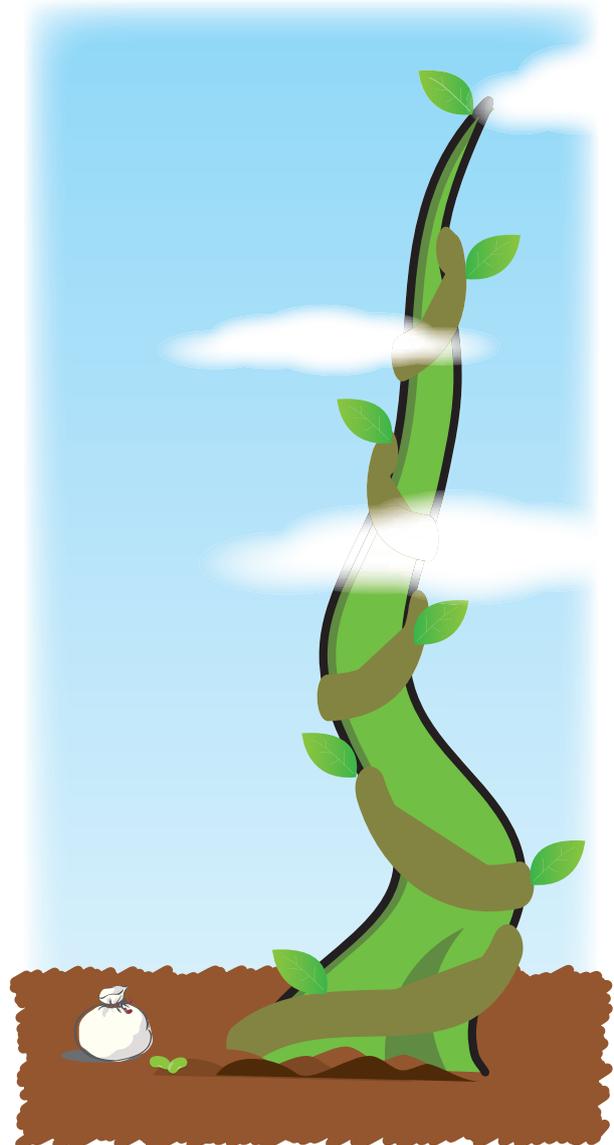
『ジャックと豆の木』。僕は童話のジャックと豆の木を小学生の時劇でやったことがあった。そのとき、僕はなんとジャックの役だった。しかし本番でお母さん、お父さんが見ている中緊張してしまい、セリフを忘れてしまった。とても苦い思い出だ。そんな、ジャックと豆の木の洋画なんてどんな話だろう。僕は苦い思い出を持ちながら映画を見始めたのだった。

内容は僕の知っているジャックと豆の木とは少し違ったものになっていた。なんせ、巨人の迫力がすごかった。ゆっくりゆっくり歩くときの音、ひとつの動作でも大きな音を立てている。そんな、巨人からは恐怖しか感じなかった。そんな中、ジャックと姫君の恋模様もおもしろかった。へたれなジャックだったけど話が進むにつれてだんだん勇敢になっていった。

また、こんなところにもぼくは注目してみた。はじめ、町にいた女の子が姫君だとは分からず、おじさんにからまれているのを助けたジャック。そのとき、みんなが膝をつき何が何だかわかっていないジャック。後ろをみると姫を迎えにきていた、お城の召使いたち。驚いて慌てふためくジャック。そんなシーンがあった。そこから飛んで最後のシーン。巨人たちが地上におりてきて人間たちをあと少しで食べられるところ、巨人たちが膝をつく。王や、おつきの召使いたちは何が何だかわからなかった。後ろを向くと、王冠をもったジャックがそこにいた。

この描写ははじめのシーンと似せているのではないかと思う。最初は膝をつく側だったジャックが膝をつかれる側になる。ジャックの成長する姿が感じられるシーンだとおもう。

見ていて特にジャックが巨人と戦う場面が好きだ。大きな巨人に立ち向かうジャックは姫君のためであれ、すごく勇敢だった。豆を投げるというナイスなアクションもあり、姫君を守ることができた。そんなジャックの勇敢さをみて自分が小学生の時失敗してへこんでいたのがすごくちっぼけに感じた。ジャックみたいに僕もひとりのおんなの子を守れるような勇敢な男性になりたいと思った。



『ジャックと天空の巨人』

山田 ひと美 (やまだ・ひとみ)

授業内で鑑賞した『ジャックと天空の巨人』について、ベースとなった童話、『ジャックと豆の木』との違いも考えながらもう一度鑑賞することにした。童話との違いはいくつかあるが、映画では、悪い存在として巨人たちのほかに悪事を企む人物が登場すること、国を巻き込んだ大騒動になっていること、そしてジャックとイザベル姫とのラブストーリー的な要素が付け加えられていることだと思う。

街で馬と豆を交換してきたジャックに対して怒ったおじさんが豆をばらまいてしまう。そりゃあおじさんだって怒るに決まっている。ジャックはここで情けないとかお人よしとか、とにかく頼りない存在として印象づけられた。そして、嵐の中城から逃げてきたイザベルとジャックは運命的(?)な再会を果たすが、ここで2人はすでにひかれ合っているように思った。実際そうはうまくいかないだろうとツッコミを入れたいくなるが、映画ではこういう運命的なものをよく描きたがるなあと思う。観客としては、このあと豆が育って大変なことが起こることが分かっているので、この一見幸せの予兆のようなシーンが、嵐の夜の暗くじっとりとした雰囲気描かれているのが非常に面白いと感じた。

イザベルが豆の成長とともに天空に連れ去られてしまったあと救助に行く部隊の中でロ德里ックの思惑だけが違っていることがわかりやすく描かれているのだが、あまり考えなくても楽しめるところがファンタジー作品のいいところだなあと思った。

また、童話ではジャックの冒険心について描かれているが、映画ではジャックの冒険心よりイザベルの冒険心が強く描かれていたことが印象に残った。もし私がイザベルなら何があるかわからないところのこのご冒険しに行ったりしないのと思ったが、やはりそこはお決まりの展開、イザベルは探検しに行き、そして巨人たちにとらえられてしまったようだ。

ジャックたち一行は姫イザベルを助けようと奮闘するが食われたりとらえられたりしてしまう。なんやかんやでロ德里ックが王冠で巨人たちを支配するのだが、その時の振る舞いようには本当に腹が立った。そのぶん彼がエルモントによって倒されたときスーッとした気分がした。因果応報というかやっぱり悪いことを企むとそうなるようなあという感じがした。

最終的には一番頼りなさそうな(実際そうだった)ジャックが巨人たちを追い払うことに成功、それでめでたしめでたし。童話と同じエンディング。強そうで実際強いヒーローが活躍する作品もいいが、こういうのもいいものだな。ジャックとイザベルが最後は結婚するという設定も、わかりやすくてありがたいが嫌いではない。個人的には、意外性のなさには欠けるが面白い作品だと感じた。

『ジャックと天空の巨人』を見て

森 大地 (もり・だいち)

おとぎ話のセオリー通りに配置されたキャラが予定調和的に活躍して終わるストーリーですが、決して大味では無く、細部が拘りを持って作り込まれています。巨人たちの大きさや腕力の見せ方が上手で、『進撃の巨人』を実写で見せて貰ってる気分です。巨人や豆の木といったフィクション要素を除いた部分を出来る限り現実的に描くことが、この種のファンタジーが見応えを獲得する秘訣だと分かってもらえました。

まさか最初のシーンが後の伏線になっているとは思いませんでした。

他にもクスッと笑えるシーンはたくさんありましたので、最初から最後まで楽しめる作品になっていると思います。

いちばん最後のシーンでは騎士団の裏切り者が持っていたカバンと同じカバンを持った少年が王冠を見てニヤッとしていましたが、あれが次回作の伏線となっているのでしょうか？

次回作があるとは思えませんが、
このような伏線らしきものを映画の最後の最後に持ってきて
あとは視聴者にお任せ方式の映画はわりかし好きです。

今後、この作品の後日談を勝手に想像してなお一層楽しもうと思わせる内容でとても良かったと思います。